

弥生

〔やよい〕令和4年3月

弥は「いよいよ」「ますます」という意味で、「たくさんの植物が生まれて花盛りになる」という意味があります。

発行：北海道神社庁一區教化委員会

勝つ事ばかり知りて、負くる事を
知らざれば、害その身にいたる
おのれを責めて、人をせむるな

東照公御遺訓

今月のことば

勝つ事ばかり知りて、負くる事を
知らざれば、害その身にいたる
おのれを責めて、人をせむるな

東照公御遺訓

人生は何でも勝てばよいとし、一步退いて考え直すことを知らないものは、却って害がその身に至る。害は勝利にのみ酔いしれている自分自身が造り出したものに外ならない。

「人生は反省が大切である」。反省すれば自分の出所進退について、他人を責めるよりは、自分を責めることの方が大切なる所以を知ることが出来る。

「勝つ」とは「俺が」という「我」に勝つことである。「負くる」とは、「我を張ってはいけない」という反省である。「反省は成功の基」とも「負けるが勝」ともいわれる。人生は勝敗の裏にひそむ反省心を顧みるか否かにかかる。

（続神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋）

季節のまつり

上巳

三月三日
桃の節供「ひな祭り」

上巳の節供、一般的には「桃の節供」として親しまれているひな祭りですが、もともとは田植への前に田の神様を迎えるために、紙や土で小さな人の形を作り、体をなでてけがれを落とし、川や海に流す祓の行事であったようである。その人形が次第に豪華になり現在のようになひな祭りが行われるようになりました。この日、女兒の成長を祝い喜び、末長い幸福を祈ります。ところで、俗に雛人形はあまり長く飾ると女の子の婚期が遅れると考えられ、ひな祭りが過ぎた翌日以降、なるべく早く片付けべきといわれています。

社日

三月十六日
「戌の日」に豊作祈願

社日は、産土神（生まれた土地の守護神）を祀る日で、春分・秋分の日に最も近い戌の日をいいます。「戌」という文字には「土」という意味があります。この日、土地の神を祀って春は五穀の豊作を祈願し、秋には実りの収穫に感謝します。

春分

三月二十一日
「我が家の守り神」に感謝の祭り

この日を中日に前後三日の間をお彼岸と呼びます。ふだんは忙しくてなかなか行けないお墓にも、家族そろってお参りしご先祖のお祭りをしますが、これはわが国の伝統的な祖先を敬い大切に信仰に由来しています。

春彼岸について

わが国に、一年中で祖霊を祭る共通の大きな機会が四回ある。正月、春彼岸、盆、秋彼岸がこれである。このうち彼岸は春分と秋分の前後三日ずつ、計七日間を指して言う言葉で、暦日としては陰暦によっている。彼岸の文字は仏語から出ているが、春の農耕等に着手するための前提として祖霊を祭ることは、やはりわが国の固有信仰の習俗から出ているといえる。これを、言葉が外来語で、行事の形式も仏の供養に似ているから仏教独特のものと思うのは誤りではないかと思われる。これは仏教が伝来してから民間に普及するまでの長い間に、わが国の祖霊祭祀の習俗を多く採り入れたためであって、元来は祖霊祭祀という日本民族の固有信仰によるものであった。

彼岸が祖先を大切に考えての祭りであることは、物故した祖霊にばかりではなく、生きている祖先たる親に対して行われることでも分かる。愛媛県の一部に「彼岸養い」といって、親に供膳することが行われている。このように子が親に対して供膳して孝養をつくすことや、嫁が御馳走をつくって里親の許に持参する例も多い。これはまさに、盆の生御霊（いきみたま）供養といわれることと全く同じことが、彼岸にも行われていることを示している。

彼岸行事は、子孫たるわれわれが今生きていることは両親あつてのことであり、さらに祖先あつてのことであることを忘れぬ限り続けられて行くであろう。祖霊祭なくして彼岸は成り立たない。祖霊に報恩の誠心を捧げつつ、生きるための営みを、わが民族は悠遠の昔から続けて来たのである。

千秋万歳

人の長生きを祈ること。
その言葉。「いつまでも健康で長生きで」という意味。



参考文献 『くらしと祭り百話』小野迪夫（神社新報社）

令和 4 年
2022年

3 月

日	月	火	水	木	金	土
		1 大安 うし	2 赤口 とら	3 友引 ひなまつり う	4 先負 たつ	5 仏滅 啓蟄 み
6 大安 うま	7 赤口 ひつじ	8 先勝 さる	9 友引 とり	10 先負 いぬ	11 仏滅 る	12 大安 ね
13 赤口 うし	14 先勝 三りんぼう とら	15 友引 う	16 先負 社日 たつ	17 仏滅 み	18 大安 彼岸入り うま	19 赤口 ひつじ
20 先勝 さる	21 友引 ● 春分の日 春分 とり	22 先負 いぬ	23 仏滅 る	24 大安 彼岸明け ね	25 赤口 うし	26 先勝 三りんぼう とら
27 友引 う	28 先負 たつ	29 仏滅 み	30 大安 うま	31 赤口 ひつじ		

二十四節気

【啓蟄けいちつ】…五日

旧暦二月卯の月の正節で、このころになると、冬眠していた地中の虫も、そろそろ穴を啓(ひら)いてはい出してきます。

【春分しゅんぶん】…二十一日

旧暦二月卯の月の中気で、この日を春の彼岸の中日といい、国民の祝日になっています。太陽の中心が春分点に達し、太陽黄経零度になり、昼と夜の長さがほぼ等しくなり、この日を境に昼が徐々に長くなり、夜が短くなっていきます。

六曜・選日

《六曜》

【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし

【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む

【先負】…諸事静かなることよし、午後大吉

【仏滅】…万事凶、患えば長びくおそれあり

【大安】…何事をするのにも吉の日、大吉日

【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉

《選日の吉凶》

【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大吉日

七十二候《3月》

春分

初候・雀始巢(すずめはじめてすく) (雀が巣を構え始める)
次候・桜始開(さくらはじめてひら) (桜の花が咲き始める)
末候・雷乃発声(かみなりこえをはつ) (春のかみなりが鳴り始める)

啓蟄

初候・蟄虫啓戸(ちちゅうこきひら) (冬ごもりの虫が土から出てくる)
次候・桃始笑(ももはじめてわら) (桃の花が咲き始める)
末候・菜虫化蝶(なむしちようとなる) (青虫が羽化して紋白蝶になる)

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つの候に細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

安産祈願 3月の戌の日

10日(木)
22日(火)

*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

《21日 春分の日》

自然をたたえ生き物をいつくしむ日です。

● 祝祭日には国旗を掲げましょう

「君が代」に込められた先人の願い
君が代は 千代に八千代に
さざれ石の 巖となりて
苔のむすまで

国歌「君が代」は、『古今和歌集』の賀歌の中で一番にある歌が、初出だといわれています。平安時代に歌われていた「君が代」は、鎌倉時代に降になって神事や宴席の最後に歌われる祝歌として一般に広がり、江戸時代に至ると物語、伽草子などの文芸、浄瑠璃、謡曲など芸術にも登場するようになります。「君が代」は朝廷から武士、農民、町人を問わず、また江戸、京都などの都市から南海の離島に至るまで歌われました。千年以上も人々に親しまれ、祝賀の歌として使われてきました。明治の時代となり国歌の制定に際して、「君が代」が選定されたのは当然のことでした。日本の伝統として「君」と「国民」は分け隔てなく、「皇位の隆昌」はすなわち「国の繁栄」であり、かつ「国民の幸福」であるということが「君が代」の歌に込められているのです。それは、日本国民共通の願いの表現でした。

この国民共通の願いは、日本国憲法第一条に「日本国と日本国民統合の象徴」として天皇が定められているのです。